

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 2001/1 第16号

イリオモテボタルの最新情報

日本ホテルの会会長 矢島 稔

久しぶりに沖縄の先島諸島を訪ねたのは10月中旬であった。東京は急に涼しくなって日中でも16度位になり肌寒く思われる日が続いていた。しかし石垣空港に降り立つと30度で真夏の焼けつくような太陽がぎらぎら輝いている。

石垣島から西表島へ行くのは船で、以前は波にゆられ少なくとも3時間はかかったのに今回は高速船が白波を立てて、僅か40分で船浦港に着いたのが驚きの初めであった。

ハイビスカスが咲き乱れ、マングローブの緑が濃い亜熱帯の原生自然は以前と変わらぬ姿で20年近い年月を忘れさせてくれた。

イワサキゼミのコーラスを聴きながら半袖のTシャツに汗を流して歩いていると、若い頃にもどって好奇心にあふれる昆虫少年になっていた。

オオゴマダラ、リュウキュウアサギマダラは当然だがかつては迷蝶といわれていたヤエヤマムラサキが多いのにも驚いた。群がって花に集まる中にオキビエダシャクを見つけたのもなつかしい。

ところでこの島にきた目的の一つはイリオモテボタルについての最新情報を得たいことであった。

この種については1983年に西表島で発見され1994年に記載された事をご存じの通りで会員の大場信義さんが詳しく調査されている。この事については「インセクトリウム」(34巻5号)等を見ていただきたい。今回はその時の状況や環境を自分の目でたしかめたいと思い、琉球大学熱帯生物圏研究センター西表実験所の金城政勝さんをお願いして島のあちこちを見せていただいた。

先ず初めて発見された祖納の石垣はそのまま保たれていて写真で見た通りであったが、道は舗装されていた。大場さんは島の人たちに生息環境を示し、みんなで探して欲しいと熱心に話をされた事も聞いた。

その結果、島のあちこちの村で見つかり、やはり人里に多く人々が生活している環境を選んでいるのが確かめられた。

面白いことにこれは特別天然記念物に指定されているイリオモテヤマネコと同じで、決して奥深い原生林の中には多くない

そうである。

そして3年程前に環境庁が調査してイリオモテボタルの分布をまとめた。金城さんもそれに協力して島の人達から報告があると、その場につけて個体数を確かめたそうである。その結果、島の周辺にある村々に殆ど分布していて、上原では一軒の約80坪の畑に52匹のメスが見つかったという。

その場所はイモなどが植えられていて珊瑚礁の石などは全くなかった。私もその場に立ってみたがなぜこういう場所にいるのか不思議でしかたがなかった。

成虫は2月に羽化し、メスは腹端を上げてローソクのように光るが、それは夕ぐれに30分位のわずかな間だそうだから、是非そのうち確かめに行きたいと思っている。

しかし、この調査は島の人達に関心をもってもらう事になり今後もそれを絶やさないように環境を守っていこうという意識をたかめた効果は大きいと思う。

実はこの滞在中にNHK 科学電話相談に電話してきてくれた大嶺君（舟浮小中学校の4年生）に会うために白浜から舟浮村へ渡った。

この村は家が11軒で、質問してくれた大嶺君が飼っていたのはオオシママドボタルの幼虫であった。夕方になるとあちこちで光はじめ地上をはいまわっている。

数えてみると20匹ぐらいはすぐに見つかった。体長は5センチ位ある。

島の人達は家の近くにいつも居るせいか余り関心もない。大嶺君には何をどの位食べたか等を日記につけるように話してきたので将来楽しみだ。

この舟浮でも1975年にイリオモテヤマネコが見つかっていて、それを捕まえたのは大嶺君のお父さんだという事も伺った。

はるかな先島諸島にはそうしばしば行けないが、誰も人のいない海岸に座っているとカニが走り海の上を蝶が飛んでいく。

海浜植物の根元に20頭ほどカバマダラやリュウキュウアサギマダラが集まって来て丁度クヌギの樹液を吸うように、その木から出る汁を吸っているのを私は初めて見た。こういう事を誰かが観察し報告しているのだろうかと思いながら、まだまだ野外で見なければならぬ事が沢山あるに違いないのだが、そういう事をする人は決して増えていないのではないだろうかと思わず心配になった。

日本ホテルの会は身近な自然と生き物の関係に興味をもち、野外で実際に確かめる事の大切さをひろめていきたい。華やかな成果は選んだ生物を多方面から調べつづけた結果に得られるもので、こうした地味な観察が「生命」を知る事になると思う人を会員にして発展させたいと願っている。



初めて発見された祖納の石垣



この畑に52頭のメスがいたと話す主婦

第9回「ホテルを通じて身近な自然を考える」 シンポジウムの報告

日本ホテルの会が主催する第9回「ホテルを通じて身近な自然を考える」シンポジウムが、2000年11月17日（金）に東京ウィメンズプラザホール（渋谷区神宮前）にて開催されました。シンポジウム当日はあいにくの雨でしたが、約70名ほどの方々にお出で頂きました。今回はこれまでの各省庁・自治体に加えて、企業における環境を考えた取り組みについての報告がなされました。

シンポジウムは矢島会長の挨拶に始まり、当会会員の鈴木浩文さんによる基調講演が行われました。演題は「ゲンジボタルの遺伝的多様性からみた保全対策」で、ホテルの移植や放流を行うときの問題点が指摘されました。この内容については15号のニュースレターで紹介されました。

続いて共和コンクリート(株)の成田義昭さんによる「環境を考えた新しい試みについて」の講演がありました。多孔質のポーラスコンクリートを使用した根固めブロックの河川沈漬試験から、ポーラスコンクリートは水生昆虫や藻類に対しては自然河床と同等な生息場所になることが報告されました。

環境庁の植田昭浩さんは「生物多様性の保全を中心とした野生生物保護の現状」と題した講演の中で、環境庁が取りまとめている野生生物のレッドリスト・レッドデータブックの作成・公表の経緯が語られました。また、近年問題になっている国外からの移入種問題について、生態系への影響や在来種との交雑による遺伝的な汚染だけでなく、園芸、ペット、内水面漁業、輸出入など多岐にわたる問題の構造とそれに対する検討会の設置などの話題が提供されました。

農林水産省の川合勝さんは「農林水産省における自然環境保全の取り組み」の中で農村の有する多面的な機能を再評価した田園空間を整備するためには、都市生活者の視点のみならず、国民全体の視点から中山間地域の振興を支援していく必要があることを話されました。

建設省の池内幸司さんは「良好な河川環境の保全・復元と川に学ぶ社会の実現」と題して講演されました。まず日本の河川の特徴が示され、河川法の改正と多自然型川づくりや河川環境に関する調査研究、河川環境教育への取り組みに関する事例が紹介されました。

また、東京都の宮川修さんは「みどりの東京計画の中間のまとめについて」講演され、50年後における東京の緑の将来像や今後15年間に取り組むべき緑づくりの目標について紹介されました。

総合討論では本多理事が司会を務め、実際にホテルがいなくなってしまった場合には、どこからホテルを移植したらよいのかとか、トキのように世界的に絶滅に瀕している生物を人工的に維持していくことの意味などについて会場の方々と共に議論がなされ、最後に小西理事の挨拶にて閉会しました。



ホタルの住める環境づくり

北海道ホタルの会会長 江口健二

私達が「ホタル」とつき合い始める事になったきっかけは、決して自発的な取り組みからではなかった。

「ホタルの飼育など出来るものでしょうか」と突然息が止まるような難問が「旭川生物同好会」に持ち込まれたのだ。難問の主は同じ町内に住む耳鼻科のお医者さんで、仕事柄、耳の不自由な子供達に視覚を通して感動を伝える事が出来ないものだろうかと以前から考えていたのだという。1979年9月も末の事であった。

植物や昆虫、微生物や浮遊生物などが好きで、永いこと好奇の目を輝かし続けてきた仲間達であったが、ことホタルに関しては全く白紙の状態であったから、挑戦意欲は想像以上のものであった。

早速、活動手順の打ち合わせが始まり、東京の多摩動物公園にあるホタル飼育施設を見学に出掛ける者、資料や文献を片はしから収集して廻る者、そんな中で、地元北海道の小樽浦臼などでは一足早く静かな活動を展開している事が分かった。私達にしてみれば、先輩チームがいることはそれだけで心強い存在であったし、自分の街に棲むホタルを静かに追い続けている姿に頭が下がる思いであった。

院長先生はホタルなら何でもイイ訳ではない。沢山光っていれば美しいかもしれない。しかし、美しいものならいくらでもある。出来ることなら、私が小さな頃見て感動した旭川のホタルを呼び戻したいのだ。くさむらの中で淋しく光っていたホタルを見た時の感動を、耳の不自由な子供達にプレゼントしたいと思っている。

確かに、戦後しばらくの間は街の公園でも、堤防へ行っても時期になると川風に

乗ったホタルが柳の間をスーと飛ぶのを見る事が出来た。

戦後、物資が僅かずつ出廻るようになり、道路が整備され住宅地が郊外に広がっていった頃、ホタルは街の中から姿を消してしまった。街を追われたホタルはどこに行ってしまったのか。誰も知らない街はずれの灌漑溝のくさむらの中で、小さな瞬きを灯し続けていて欲しい。

私達は郊外の小中学校にご協力を頂きホタルに関するアンケートの集計をすると、調査17地点の中でホタルを見た事があると回答を寄せた割合は73.7%と、予想を上廻る高率で私達を喜ばせてくれた。これもやってみて初めて分かった事だ。調査項目の回答をもとに関係河川の川底を1本1本根気よく掬いあげ、バットに払って巻貝を中心に記録する。

確かにホタルを飛ばすだけならば、こんな苦労は絶対回避しなければならないだろうが、自然を相手に何かを始めようと思えば避けて通ることの出来ない営みの一部で、苦労などと呼ばれる程大それた事でもない。

「ホタルは人間の為にあるわけではない。ホタルは環境すべての結晶だ。」と矢島先生はおっしゃった。

耳鼻科の院長先生は医局をホタルの飼育室に開放したり、住宅の庭に人工水路(20m)を造成したり献身的なご協力を頂いたが5年目に突然倒れ入院し1995年6月逝去(73歳)された。

その意志を継いで「北海道ホタルの会」は昨年秋、第20回総会を開き、道内の有志は地味ではあるが、着実にホタルの定着できる環境づくりに取り組んでいる。

対馬のアキマドボタル天然記念物指定地

日本鞘翅学会会員 後藤好正

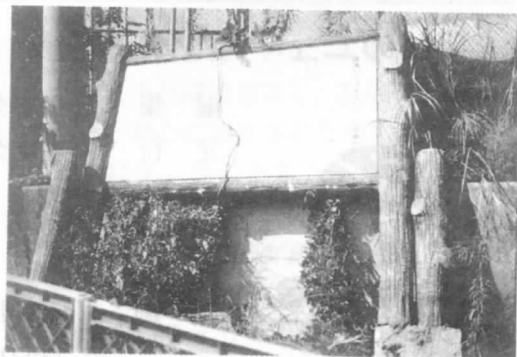
対馬は九州と朝鮮半島の間に浮かぶ島です。かつて半島と日本列島が地続きだった頃は陸橋として大陸から日本への動物の移動経路になっていました。そのため現在でも対馬だけに見られる大陸との共通種がいくつかに生息しています。そのひとつがアキマドボタルです。私は仲間と昨年の10月に久しぶりにアキマドボタルに会いに対馬へでかけました。アキマドボタルは長崎県指定の天然記念物になっていますが、種指定ではなく「阿須川のアキマドボタルと発生地」という地域指定です。アキマドボタルは陸生のホタルで林縁や少し開けた草地、畑の周辺などに生息していて、幼虫はカタツムリを食べます。したがってアキマドボタルの発生地として阿須川を指定するのは少々変な気がします。アキマドボタルは日本には対馬だけに生息していること、日本本土にはいない9月から10月にかけて出現する種であることなどが天然記念物指定の理由ではないかと思います。一方、阿須川は旧城下町で対馬の中心地である厳原の町はずれにあり、有名なホタル（ゲンジボタル）の名所だったそうです。対馬出身の作

家、竹内重夫さんに「望郷対馬」という本にはかつて蛍合戦が見られたほどの多産地であることが書かれています。おそらく指定するにあたって担当者がアキマドボタルを良く知らずに、ホタルの発生地ということで、ゲンジボタルの名所であった阿須川を指定してしまったのではないかと思います。

その阿須川には厳原から空港へ向かう川沿いの道路に天然記念物指定の看板が立っています。昼間、比較的時間があいていた私達は阿須川へ出向きました。ところが、久しぶりに見る阿須川にはバイパスの工事中で道路用の橋ができていました。そして、看板は取り外され、道路脇に立てかけられていました。川において見ると綺麗な水が流れていて、多数のカワニナも認められました。おそらくゲンジボタルはまだ健在なのでしょう。しかし、橋に照明がつけられ煌々とした明かりが灯るようになれば、おそらくホタルは棲めなくなるでしょう。私は照明が設置される計画になっているかは知りません。しかし、これまでの道路計画を見る限りでは照明が設置される確



阿須川にかかるバイパス道路の橋



取り外された天然記念物の看板

率は非常に高いと思われます。もしそうなら大変な問題です。仮にもホテルの天然記念物指定地です。たしかに島民の利便性や工事による経済効果というメリットもあるでしょう。一概にバイパスを作ることに反対はできません。交通量や他のルートなどを十分に検討した上での計画ならばしかた

ありません。そうであるならばなおさら、ホテルに影響の少ないように照明の工夫がなされるべきではないでしょうか。この道路が完成した姿を見るとき、自然環境や生き物に対する行政の姿勢が問われることがなければと思っています。

事務局からのお知らせ

昨年12月16日(土)に理事会が開かれました。シンポジウムの反省・総括や来年度の活動計画などについての打ち合わせがなされ、次の2つが話題に上がりました。また、会員証の再発行や会則の改訂も検討しています。

・談話会の開催

今年度中に一度、水生昆虫関係の談話会を計画しています。土曜日の午後、昭和女子大学(三軒茶屋)での予定です。

・観察会の開催

ニュースレター15号で紹介しました八王子市板当沢(いたあてざわ)の観察会を5月頃予定しています。いずれも詳細が決まり次第お知らせ致します。

運営上の疑問やご意見などがございましたら、事務局までご連絡下さいますようお願い致します。また、事務局ではニュースレターの原稿を随時募集しております。地元のホテルの会の活動やイベントの紹介などありましたら、お気軽にお寄せ下さい。

人里へのニュースレター 第16号 平成13年1月31日発行

編集 日本ホテルの会 ニュースレター編集事務局

発行 日本ホテルの会

〒156-0041 東京都世田谷区大原2-17-6

ステーションプラザ代田橋410(株)オーグラム内

TEL・FAX 03-3328-7379

印刷 プリントランド・スガイ

〒239-0815 神奈川県横須賀市浦上台2-27-936

TEL 0468-43-1356 FAX 0468-43-1366

